

市高図書

発行

徳島市北沖洲一丁目
徳島市立高等学校
図書委員会
印刷
協徳島印刷センター



本との出会いは人との出会い

学校長 天羽 博 昭

本は「生き物」です。本は一冊一冊に不思議な力があります。私たちが本を読むと、本は様々な働きかけを私たちにしてくれます。読む人の心を感動させたり、知識を授けてくれたりします。こちらから親しく接してあげればいくほど、本はそれに見合ったお返しをしてくれます。

書店でふと見つけた絵本の帯に惹かれ、手にした一冊の絵本の紹介をしたと思います。新聞配達をする少年が主人公であるその本の題は『おばあさんのしんぶん』です。少年は、父が出征し、女手一人で働く母を助けるため、新聞配達をするのになりました。仲睦まじい老夫婦の家に朝刊を届けるうちに、少年は老夫婦に気に入られました。老夫婦の主人は少年が新聞配達を始めたのも一つの理由が、新聞を読みたかったためだと知り、配達を終えた少年を家に招き新聞を読ませてくれるようになりまし。少年は、毎日老夫婦の家で新聞を読めるのが嬉しくて

急いで配達を終えるのでした。ところが、ある日、主人が亡くなりました。それでもおばあさんは、これまで通り少年に新聞を読ませ続けてくれました。そして、おばあさんは毎日、新聞を読む少年の傍らで座り微笑みながら彼を見守っていました。ある冬の日、少年がいつものようにおばあさんの家で新聞を読ませてもらうと家を訪ねると、おばあさんは体調を崩していました。そしてついには、肺炎をこじらせて死んでしまいました。少年は、おばあさんの葬儀に行き、その時はじめて近所の人からおばあさんの字が読めなかったこと、少年に新聞を読ませるために毎日新聞を取っていたことを告げられました。少年は、その事実を知り感謝の気持ちで涙が止まらなかったという内容です。

おそらくこの絵本を読んだ人は、読後に、もし少年が老夫婦と知りあわず、新聞を読めずにいたらどんな人生を送っていたのだろうか。たと

え新聞を読むことができたとしてもおばあさんの優しさに包まれなかったらどんな人生になったのだろうかなどと思いめぐらせることでしょう。このように、本は読み手に様々な「想い・質問」を投げかけてくれます。

講談社の創業者でもある野間清治氏は、人生を成功に導く条件として「事上練磨」「人上練磨」「書上練磨」の三上練磨を挙げています。事上練磨とは、自分が体験した成功・不成功の中から学んで行くということ、人上練磨とは、人の体験や経験から学ぶということです。そして、書上練磨とは、書籍から学ぶということです。人が一生の間に、出会える人の数は平均約三千人といわれます。ましてや師と仰ぐような人との出会いは数えるくらいでしょう。自分自身での経験にも時間に限りがあります。その道を究めた人たちの書には含蓄のある内容が網羅されている場合が多く、知的向上に大いに役

立ちます。たくさん本を読む事で、安易に友達と迎合したりせず自分の考えをもつことが出来ます。愚痴や不平不満も減るでしょう。本を読めば強くなります。同じような境遇を経験してきた先人がその当時のことを書き留めているからです。迷った時や辛い時の対処方法を本から学び取ることが出来るからです。よく「座右の書」と言われますが、人生の支えになるような本との巡り会いは、人を飛躍的に成長させてくれます。

ちなみに、前述した『おばあさんのしんぶん』は、原作者岩國哲人さんの実話をもとにした話です。戦後の苦しい時代、新聞をとる余裕のある家は多くありませんでした。新聞を読ませてくれた老夫婦との出会い、時は経ち、おじいさんからおばあさんへ受け継がれた優しさ、そしておばあさんが亡くなったときの思いがけない事実が少年を大きく成長させました。岩國哲人さんは、その後東京大学法学部へ進み、アメリカの

ウォール街でトップビジネスマンとして活躍後、出雲市長となり、木のドーム球場を作るなど数々の実績を残し注目され、衆議院議員となりました。

本との出会いは、偶然ではありません。自分から本との出会いを求めれば、いつでも出会うことが出来ます。読書から得た知識がヒントになって、新しい考えが生まれることもあります。「本との出会い」はより身近な「人との出会い」です。部活や塾通いで「忙しい」から本を読む時間がないと思っている人、「忙しい」は「心を亡くす」と書きます。少しの時間でも読書をしてみませんか。これからの社会は、読書する人とならない人の差がますます大きくなる時代になることを肝に銘じておきましょう。

本校の図書館には約三万冊の本があります。まずは一ヶ月に十冊（人？）と出会うてみませんか。

活動報告

図書委員長 201HR 永安惣一郎

みなさんは本を読んでいますか？今さら本を読んでも時間の無駄と思っている方はいませんか？それは違います。読書の習慣を身につけると、あなたの集中力は鍛えられ、語彙力が飛躍的に増えていきます。また、論理的な思考も身に付くので、スラスラと理解しやすい文章運びが出来ようになります。

市高の図書室の特徴は静かで本を読む環境が整っており、本自体がき

れいなどころです。本の整理をしている時、かなり使われている本であっても欠落はなく、落書きは見ることがありません。大切に使われている証拠だと思います。

最近は何か調べる時はインターネットを使う人が多いです。しかし本を使って調べることと違った知識を得られることは必ずあります。是非図書室にお越しください。是非図書室にお越しください。是非図書室にお越しください。

生徒作品

第62回青少年読書感想文
全国コンクール

徳島県特選

『赤いろうそくと人魚』を読んで

小柴奈々美 (108 H)

ヒトを人たらしめるものとは何なのだろう。理性や節制のような、己を論す自制心なのか。あるいは、喜怒哀楽や欲望のような、生きることへの刺激を喚起するパッションなのか。私はこの問いの答えを知らない。

そもそも、こんな問いに答えがあるのかさえ、知ることはできないのかもしれない。しかし、様々な情操が交錯し、刻々と変遷する社会を生き抜いていくうえで、このテーマの真意を追究することは、避けては通れない道だと思う。私がそんなことを考えるようになったのは、何気なく手に取った一冊の本との出会いからだ。

た。赤く燃ゆる炎を想起させる蠟燭と青く澄んだ水を彷彿させる人魚。相異なる二つの言葉の響きになんとなく心惹かれた。著者小川未明は『赤い蠟燭と人魚』に人間の身の内にすくむ善と悪の本質を託したのではないだろうか。

獣にも人間にもなりきることので

きなかった孤独な人魚の産んだ女の子は、華やかな人間界に憧れた母親の望み通り、心優しい老夫婦に拾われ、大切に育てられた。老夫婦への感謝を込めて、娘が赤い絵の具で装飾を施した蠟燭は飛ぶように売れ、この蠟燭を神社に納めると海で遭難しなくなるといふ噂までできた。噂は一躍広まり、娘が人魚であると聞きつけた南国の商人が、大金と引き換えに人魚を引き渡すよう、老夫婦に迫るようになる。

ここまでこの童話を読み進めた私は、神からの授かりものと崇めて、長年我が子のように大切に育ててきた娘なのだから、そんな申し出は断るに決まっている、と思っていた。しかし、欲に目のくらんだ人間ほど恐ろしいものはない。古来から人魚は不吉だといわれているとそそのかされた老夫婦は、娘を商人に売り渡すことに決めてしまったのだ。自分を売らないでほしいと泣いてせがむ

娘の声も、悪の化身へと変わり果てた老夫婦の耳には届かなかった。商人が迎えに来た晩、無理やり商人に引き渡された人魚は、悲しい記憶の形見として、持っていた蠟燭を赤く塗りつぶし、その場に残して去っていった。

私は、美しかったはずの老夫婦の心が、俗世の事物や無責任で自己中心的な他人のささやきによつていとも簡単に朽ち果て、醜い欲の権化と化したところに、人間が誰しも生まれるながらに有している、あるいは成長する過程で習得してしまう悪の側面をみた気がする。この点で、未明は人間という対象に関して正鵠を射ていると思った。捨てられていた女の子を無償の愛という不確かなものだけで育てたのは、明らかに利己主義の表れであり、己の欲望に逆らえず娘を売り飛ばしたのは、利己主義の表れだ。私は、人間はみんな自分が幸せに生きたいという欲望を、他人を大切にしたいという思いとの二つの対極的な感情のはざまで、同時に両者を満たすことができない苦痛に耐えながら生きているのだと思う。他人を思いやる利他主義は、ほと

んどの人が反論なく称賛するだろう。

では、利己主義に関してはどうか。一見、他人の不幸や後先を顧みず、自分本意の行動に先走る利己主義は無情で醜く、いさめられるべき感情であるように思われる。しかし、本当にそうだろうか。たしかに、他人を踏み台にして、その不幸を嘲笑いながら得た幸福は何の価値も持たないし、あつてはならない。それでももちろん、共同生活を営むうえで、他人を大切にすることはなくてはならない。しかし、誰よりも自分を大切に思う心は、命を授けられたものとして、当然持つべき感情ではないだろうか。私は、他人を前にして気を遣いすぎるがゆえに自分をないがしろにしてしまう人よりも、むしろ自己愛や矜持を秘めた人のほうが、よほど、人間味を帯びていると思う。詰まる所、真に他人に愛情を注ぐことができるのは、後者だと思う。だからといって、極端な自己陶醉に陥るのは、言うまでもなく危険だ。要は、生き物としての人間がもつ普遍の欲求と、知恵と分別をもつ賢者としての人間がもつ理性との両方を、適切に制御していくことが、「ヒト」を「人」にするのだ。

かつて神のご加護を導いた赤い蠟燭は、結局、それを見ただけで溺れ死ぬと忌み嫌われる呪いの象徴となり、老夫婦が蠟燭屋を営んだ港町は、

ついには荒廃してしまった。

今、私たちの暮らす社会はどうだろうか。私たちは適切な感情の管理下のもとで日々生き抜いているだろうか。最近、ニュースでは舐添知事の公私混同疑惑や相模原市での障がい者殺傷事件が取り上げられている。私は、これらは程度に差はあれ、思想が利己主義に傾き過ぎた例だと思う。そして、私もまた「ヒト」のままだ。私が「人」になるためにまずすべきことは、学ぶことだ。学ぶことなしに思慮分別を身につけることはできず、自分を誇りに思うこともできない。「赤い蠟燭」を教訓に、見識を広げ、自分を磨く努力を重ねることで、自分を律し、他者を愛することのできる「人」になれると信じ、真摯な学びを続けていこうと決意している。

読了作品

『赤いろうそくと人魚』

小川未明



『シンドラーに救われた少年』

鎌田 桃花 (102 H)

私たち人間にとって命は大切だということとは当たり前だと思っていた。しかし、なぜ戦争になると人々はそれほど簡単に人を殺してしまうのだろうか。私は、今まで多くの戦争について学び、戦争の中の差別などの人権問題についても学んできた。その中でもヒトラーの行ったユダヤ人迫害という凄惨な歴史は私の心に強く残り、その事件をもっと深く学び考えたいと思うようになった。そんな時本屋で目にとまり手にしたこの本を読もうと決意した。

私は、「シンドラーに救われた少年」を読み終えて思わず深いため息をついた。世界が戦争をしている時こんな事があったのだと胸が締め付けられるような思いだった。こんな事とは人権や命の大切さを無視し苛酷なまでに、あたかもゲームのようにユダヤ人を無差別に殺傷し続けたということだ。それはヒトラー率いるドイツ軍の考え方から残酷な事件を起こすこととなった。何の理由もなくほんの気まぐれで収容所長に射殺されたりムチで打たれたりした。そして、多くのユダヤ人がアウシュヴィッツ絶滅収容所のおガス室で毒殺された。その事件の証人の一人がこの本の主人公の少年レオンである。

死を約束されたレオンを含めた千人以上ものユダヤ人を救うという奇跡を成し遂げたのがオスカー・シンドラーだ。シンドラーの英雄的行為、それは途方もない危険を冒し可能な限りの死力を尽くして多くのユダヤ人がアウシュヴィッツ絶滅収容所のガス室に送られていくのを救った。このことを世界はまだ知らない。シンドラーが「君の命は、この身を危険にさらしても救う価値がある。」とレオンに言ったことでレオンは、今度は私が彼のためにできる事をする番だと考えた。シンドラーについて知っていることを語り、彼を読者の記憶の一部にしてほしいと願った。それと同時に日本には「日本のシンドラー」と讃えられた杉原千畝という外交官がいた。彼はシンドラーと同じ頃にユダヤ人の国外脱出のための渡行申請許可書に腕が動かなくなるまで、タイムリミットが迫る一秒前まで許可印を押し続けた。二人の事は絶対に忘れてはいけない。リストを作りながら、印を押し続けながらオスカー・シンドラーも杉原千畝も、「こんな事をして、こんな事くらいでどうなるんだ」と悔し涙をかみしめていた事だろう。戦争という人間が作りあげた最悪の出来事に

怒り、「人の命をなんだと認めていないんだ」と叫んでいた事だろう。私は、ナチスはなぜあれ程ユダヤ人を嫌っていたのだろうかという疑問を持った。ヒトラーは第一次世界大戦での敗北から不況にいたるまで、ありとあらゆる問題の責任をユダヤ人に押しつけ「他者」とすることでユダヤ人を排斥した。それはまるで都合のいい標的を作り上げ「浄化」という名の虐殺行為を正当化するようなものではなかったのだろうか。そして、シンドラーについて考えてみた。本で見たシンドラーは長身で体格のよい普通の人という感じがした。でも少年の日に映った彼はまさに英雄だったと思う。少年は「英雄とは最悪の状況で、最善を為す、ごく普通の人間」と言っている。シンドラーはたくさん人の名前を記憶し、一人ひとりが誰であるかを知ろうとし気にかけていることを示していた。話しかけながら少年の目をのぞき込む彼の目には本物の関心がありユーモアさえも感じさせたという。人々は彼のことを悪党、戦争成金など様々に表現した。そしてナチスの日和見主義者、策略家、勇気ある異端者、英雄などシンドラーは相反するさまざまな評価を受けているが、私はアウシュヴィッツを指揮しているナチス高官を買収し、パーティーでもてなし何役も演じ分けながらひそかに着実にユダヤ人を救うための

計画を練っていたシンドラーの実行力は素晴らしいと思った。人なつっこい笑顔と優しい眼差しの持ち主だったシンドラー。そんな彼はナチスによるユダヤ人大量虐殺を目撃した日から、その瞳の奥に決意の炎を燃やし続けていたことと思う。

今、私はアンネの日記、沖縄ひめゆりの塔、そして広島・長崎の平和の像を思い出している。どれもが戦争の恐ろしさ、苛酷さ、悲惨さ、愚かさを訴えていると思う。これから私達はその思いにどのように応えていけばよいのか、私達が本当にでき

『お伽草紙』『カチカチ山』

梅本 真有 (105 H)

私がこの本を読もうと思ったのは、太宰治に興味を持って著作を読もうと思ったとき、これならとつつきやすそうだと思ったからだ。

古今東西、男女については様々な場で議論されている。「愛することにかけては、女性こそ専門家で、男性は永遠に素人である。」と三島由紀夫は述べ、「女人は我々男子には正に人生そのものである。即ち諸悪の根源である。」と芥川龍之介は述べた。そしてこの「御伽草子」の作者太宰治も、三篇の中の一つ「カチカチ山」で男女について言及している。

原典の「カチカチ山」は、老爺に捕まえられた狸がその妻の老婆を騙して殺し、婆汁にしてしまう。そして、それを聞いた兎が老爺の代わりに狸に復讐する話である。この作品のあらすじも、概ねその通りだ。原作と大きく違うのは、兎と狸の関係について掘り下げ、太宰から見た男女の性質の違いを指摘しているという点である。

「御伽草子」が書かれたのは戦時中だ。「御伽草子」は、防空壕の中で太宰が壕から出たがる五歳の娘に読み聞かせをするところから始まっている。この「カチカチ山」は、読

ることは何か考えなければならぬ。これではいけないと思いつつ、今はただ朝になって窓を開けるといつもの景色があり、人々の笑い声や小鳥のさえずり、風の音など変わらない毎日が大切に思えてならない。でも、戦争という最悪な出来事に立ち向かっていかなくてはならない。地球上の全ての仲間と共に。

読了作品

『シンドラーに救われた少年』

レオン・レイソン著 古草秀子訳

み聞かせる中で娘が「狸さん、可哀相ね。」とふと言ったことがきつかけとなり、考えるに至った話であるらしい。確かに、兎の行動は考えれば考えるほど恐ろしい。狸汁にされたくないがため老婆を騙して逃げた狸の気持ちは分かる。老婆を殺して婆汁にするのは非道だが、兎は狸を騙した上に三回もいたぶった挙句溺死させている。いくら仇討ちと言えど、やりすぎではないだろうか。そして太宰は、ある考えに行きつく。

「カチカチ山の物語に於ける兎は少女、さうしてあの惨めな敗北を喫する狸は、その兎の少女を恋してゐる醜男。これはもう疑ひを容れぬ儼然たる事実のやうに私には思われる。」というのが、太宰版「カチカチ山」の冒頭だ。この「カチカチ山」の舞台は富士五湖、河口湖畔のあたりだ。そして兎は十六歳の美しい少女、狸は三十七歳の醜く愚鈍な大食漢として終始描かれている。太宰は、その武士道に乗っ取らない仇討ちを行った兎は、男性ではなく女性で、あの仇討ちは多感な年頃の少女特有の残酷さゆえであると考えたのだ。太宰は作中で、「人間のうちで最も残酷なのは、えてして、このたちの女性である。」と兎を分析している。

多くの少女は、嫌いな物や人に対して敏感である。少しそれに触れただけでも、悲鳴を上げて嫌がるようなそぶりを見せる人も中には居る。そ

れは嫌いな物を嫌いと言えぬ純粋さや潔癖さに裏打ちされた辛辣さであり、私も女性に顕著な特徴だと感じている。歩くのと同じだ。まだ歩き慣れない時は、少し歩けば薄い皮膚に水ぶくれができたり踵が痛くなったりするけれど、だんだん歩くうちに慣れて足の裏が厚くなって長い距離を歩けるようになっていく。それと同じで、思春期の少女には、年を重ねて多くの事柄と触れ合っていくば身に付く鷹揚さや視野の広さ、慎重さがまだ身に付いていない。だから狸にあんな仕打ちができた、と太宰は考えたのである。兎は狸を糧で叩いて沈めた後、汗を拭いて景色を見渡し、その美しさに微笑んですらいる。兎の冷酷な仕打ちを太宰は「悪魔」と形容しており、その通り兎の行為は異常である。しかし、人間には、現代の常識や法律から合理的に考えて行動に移さないだけで、これくらいのことをしてしまいたいような気持ち他人に持つことが、誰しも一度はあるように感じる。

そしてこの狸は非常に愚かである。兎の狸に対する嫌悪を察することができず、見栄のためにすぐばれる見え透いた嘘ばかり吐き、自分の容姿や能力を客観的に直視できない。即物的で、兎に老婆を殺したことを謝っている最中にも落ちていた木の実を拾って食べるほどの食欲の持ち主だ。兎に死なないようないたづら

ていることにも気づかず、火傷を負った際も「自分には神様がついてるので心配無用だ。」などのため。最後まで兎に騙され、まんまと泥の船に乗り、糧で叩いて殺される。作中において、褒めるべきところが一つもない。しかし、全く容赦せず狸を死ぬまで痛めつけた兎と違い、狸は死ぬ寸前まで兎を信じている。そこには、多くの男性にある女性への、一種のロマンや勘違いがあるのではないだろうか。そこが人間的で面白い。

「女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでゐるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかってあがいてゐる。」私は兎の言動に思ひ当たる節があり、狸にもどこか既視感を覚える。この作品は、性別・年代で感情移入の仕方が全く違うだろう。これだけ心の中に住まうものが違うのだから、衝突するのも無理はない。それは男女間での普遍的テーマの一つであり、お互いに変えることのできない根幹の問題である。

読了作品

『お伽草紙』

太宰 治



『あしたは晴れた空の下で』を読んで

久次米みなみ (106 H)

「危険を承知で便利な暮らしを選ばなら、たとえ将来病気になるたり、障害をもった赤ん坊が生まれても、それは『人は自らまいた種を刈りとらねばならぬ』で、自業自得のほうです。」

するといこの言葉が私の心にとでも残り、それと同時に恐怖も感じた。この本は、一九八六年に起こったチェルノブイリ原子力発電事故のことをもとに書かれているものである。ドイツに住んでいる日本人の少年トオルがこのチェルノブイリ原子力発電事故をきっかけに放射能汚染や家族、友達との関わりを考えていく展開となっている。この事故が起きてから、テレビでは原発のことばかりが流れて学校の友達との会話は今までとは全く違い、放射能のことが中心となってしまう。放射能汚染は人々の生活リズムを完全にくるわせ、トオルやその家族、周辺の人々をまでも苦しめていくことになる。そんなトオルには弟が生まれる。生まれたその時はトオル自身とても嬉しかったという気持ちだが文中の表現から感じとられる。しかしその後、トオルが友達に送った手紙の中に、「今は弟が生まれたことはハッピーエンドだけではありません。教室で君が

言ったあのことがますます大きくふくらんでいくのです。」という部分がある。あのことは、私が最初に作文に書いた言葉のことである。この手紙の中のトオルのその言葉で、この物語は終わっている。

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、もうすぐ、広島や長崎に原子爆弾が落とされて七十一一年が経過するからだ。原子力発電事故と原子爆弾投下は全く違ったもののように思われるが、それらが起きてから何の罪もない人々が苦しみながら生活をしていかなければならない、という点では同じようなものだと私は感じている。

この本を読んでから私は、そのような罪のない人たちが受けた被害がどのようなものだったのかを少しでも知りたいと思い、実際に空襲を体験した祖父と祖母に聞いてみることにした。祖父と祖母から話してもあったことの中で私が特に心に強く残ったのは、空襲が起きてからはずっと毎日ビクビクおびえながら生活しないといけなかった、ということだった。これは、この本の主題ともなっている原子力発電事故での人々におよぼす被害と合致するものだと思う。何か大きな事故が起こっ

てそれに対する被害におびえながら生きていくというのは本当に大変で辛いことなんだとこの時改めて感じることができた。

そんなことをしている間に私の頭の中にはもう一つひつかかるものがあった。二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災である。東日本大震災でも原子力発電所での事故があったことを思い出した。ふと本の初めの部分を開いてみるとそこには読者からの感想がかかれていた。その中にこのような感想があった。「チェルノブイリの事故があったのなら、なぜ同じことが起こらないようにしなかったのでしょうか。」私と同じように東日本大震災のことを思い出した中学生の声だった。

私は、この本を読むまで、チェルノブイリ原発事故のことについて聞いたこともなかったので全く知らなかった。しかし、この本を読むにつれて、チェルノブイリ事故がどのようなものだったのかを知り、東日本大震災による原発事故と同じこと、また結果的には、戦争による人々の被害者になった時の気持ちまでも同じことが起きてしまっていたことが分かった。だから、その中学生の読者の感想にとっても共感できた。そして、チェルノブイリ原発事故から二十五年たち、原因は地震だったが結果的には同じようなあやまちをくり返してしまった人間とは、なんて

おろかな生き物なのだろうと思った。自分たちが、より快適で便利に過ごしたい、という思いを優先するため、次々と原子力発電所を建て、それによって多くの犠牲者を出した。そして目では決して見ることでできない放射能というものにおびえながら生活していかなければならなくなった。そのような日々を過ごすことを考えると私は本当に恐くて仕方がない。

私は中学生のころ、夏休みの自由研究で地球温暖化について調べたが、その時、エネルギー問題の資料も読んだ。すると原子力発電が一〇〇パーセント安全ではないということが分かった。だから今すぐにでも原

『王家の風日』を読んで

植田 賢 (108 H)

『王家の風日』は古代中国を舞台にした歴史小説だ。数百年にわたって栄えた商王朝を周が滅ぼしてこれに取って代わる「商周革命」の一部始終を、王侯や武人、官吏などといった様々な立場から描いた作品である。

以前から中国古代史に興味のあった私に、母が自分の蔵書の中からこの本を薦めてくれた。

物語では、人が、自らの信念を貫きつつ共同体の中で力を尽くすとはどういうことか、というのが一つの大きなテーマになっている。そして、

子力発電はやめてほしいと思った。しかし、原発にかわるクリーンエネルギーなどが必要量は十分だとはいえないのも確かである。ということになれば、私たちの生活自体を変えていくしか安全はないのである。今の私たちのライフスタイルを変え、エネルギー対策をもとから見直す、そういう少しの心がけが私たちが生きる社会に安全を与えるものとなるだろう。

読了作品

『あしたは晴れた空の下で』

一ぼくたちのチェルノブイリ

中澤晶子 (作) 小林ゆき子 (絵)

これを象徴する人物が二人いると思う。箕子と千子である。

この二人は商の王族で、暴君・受王のもとで破滅に向かう王朝を守るべく死力を尽くす。私は、組織や社会のために私心を排して奮闘する彼らの生き方に深く感動した。

箕子の人物像については、理性的で頭脳明晰、かつ処世術にも長けている、といった印象を受ける。宰相としての働きもさることながら、話中で紹介されている彼に関する数々のエピソードからも、そうした彼の

優れた気質がうかがえる。その中でも私の心に残っているのは「象牙の箸」の逸話だ。

これは、受王が象牙の箸を使っているのを見た箕子が、そこに国家の危機を見出した、という話である。今は箸だけの贅沢でも、いずれそれが暮らしの全体に及び、王の生活が乱れて国を傾かせると思い、恐れたのだ。

私はこの話から、箕子の観察眼の鋭さとともに、政治家としての意識の高さがうかがえると思う。常人ならば、象牙の箸が目にとまったところで、王の多少の贅沢、と見過ごしてしまいかも知れない。そこを見過さず、王の心の乱れと国政の凶兆を見てとったのは、日頃からあらゆることに気を配って世の中の動きを察知しようとする、箕子の高い意識があったからだと思う。そして、これはいつの時代も為政者に必要とされることに違いない。

その箕子とともに強く心に残っている人物が千子である。ただ、彼の人物像については箕子とは対照的でもいべき印象を受ける。武骨で生一本、行動派の現場主義者、といったところだ。

千子もまた箕子と同様に側近として受王を支えたが、彼は自ら陣頭に立って働くことを好み、部下を率いて国内を東奔西走した。そんな彼についての話の中でも最も強く印象に

残っているのは、その最期である。商の滅亡が近づいた頃、暴政乱行を繰り返す受王を千子は何度も諫めた。しかし、王が行いを改めることはなく、ついに千子は非常の手段に訴える。王に斬りかかったのである。結果、彼は衛兵に討たれて非業の死をとげた。

私は、この千子の抜刀は決して自暴自棄になつてのものではなかったと思う。王を諫止できなかった自らには死を与え、王にはこれ以上乱行を繰り返させないようにし、暴君を除くことで王朝に未来を残すための行動、すなわち、主と組織のことを思つての決断だったと思うのだ。家臣が主君に刃を向けたという構図ではあつても、そこには、常に自ら行動することを重んじ、主・受王を正面から諫めた千子の気概が見てとれる。彼もまた、社会のために尽くす偉大な政治家の好典型だろう。

さて、この二人の生き方を見ていった時、一つのことを考えさせられた。箕子の理知や千子の気骨はどのようにして育まれたのか、それらを生む要因はどこにあったのか、ということだ。

物語の中で彼らの前半生は描かれていないので想像するしかないが、私は、彼らが育った環境がその理由だと思う。尊敬する師や愛読する良書、そして、彼らに期待し導いてくれる一族、といった存在がある環境

にいればこそ、それぞれの類いまれな能力が花開いたのではなからうか。そして、彼らもまた、未来を担う人々にそうした環境を与えようとしていたのだと思う。例えば箕子は、後に商を滅ぼした周の武王に招かれ政治について問われた際、惜しみなく教えを説いた。これは、かつての立場や私怨を捨てて、次代の優れた指導者を育てたいという思いの表れだったと思う。そのための環境を、自ら作ろうとしたのだろう。

『王家の風日』では他にも様々な人物が活躍するが、私は、箕子と千子の生き方には今の時代を生きる上でも学ぶべきことが多くあると感じる。例えば、私自身は将来医師

として働きたいと思っている。いつの時代も、どこかの地域でも必要とされる職業だと思うからだ。しかし、時代と地域の実情を見極める力と、人命を預かっているのだという重い覚悟を持って仕事に臨まなければ、真に社会に貢献することはできないだろう。私はこの本を読んで、世の中のために尽くした箕子や千子などの偉大な先人たちの言行に少しでも倣い、いずれは自分も、優れた人材を育てる環境づくりの一助になりたいと強く思った。

読了作品

『王家の風日』

宮城谷昌光

『一九八四年』を読んで

久米 春花 (108 H)

父の本棚で、たまたま目に止まったこの小説を読んでみようという気になったのは、村上春樹の「1Q84」とタイトルが同じであったというだけのことだった。

しかし、この約七十年前に書かれた本を読み終わって、SFであったはずの当時の「想像世界」が、私たちが生きている「今」にあまりにも類似しているという事実が驚嘆した。ICT等の発達により、オーウェルが一九四〇年代に空想した装置や仕組みは現実のものとなっている。また、世界中のありとあらゆる場所

には監視カメラが設置され、インターネットやメール、家や店での会話、殆ど全ての種類の情報が容易に収集されている。NSAのスノーデンが、登場人物の一人として描かれていてもおかしくなかったとさえ思う。

第二次世界大戦前に構想し、戦後に書かれたこの小説を全く古く感じないのは、恐らく私たちがテクノロジに支配された現代に身を置いているからこそのことである。一九五〇年代や一九六〇年代には夢物語であった恐怖は間違いなく「今」存在

している。

ビッグブラザーのモデルはスターリンだと言われているが、現代においてはそれが組織及び少数の個人に置き換わっただけではないかと思う。ヒエラルキーの頂点にいるビッグブラザーは、下階級の者たちを洗脳し互いに探らせ、密告に意味を与え、恐怖で思考をコントロールしようとする。それは「今」の資本主義社会においても同じである。このストーリーの階層構造をカーストではなく、ヒエラルキーであるという認識で考えてみると、誰もが他者を蹴落とし、上の階層へ上がりたいというシステムに従い、ビッグブラザーへの忠誠という手柄をアピールする。一つでも上に、そしてビッグブラザーに近いづきたいという思いで動かされているが、実際には誰一人としてスクリーン以外でビッグブラザーの姿を見たことはない。ということは、もしかするとビッグブラザーは永遠の命を持ったスターリン、つまり「今」ではAIなのではないかということも想定できる。ビッグブラザーが人間ではなくAIだと仮定すると、階層構造は、最上位は誰も触れることのできないカーストであり、それ以降の下階層がヒエラルキーということになる。囲碁や将棋の、コンピュータVS人間の対戦などを考えると、その構造さえもが現実のものとなる日も遠くないのではないかと想像してしまう。

それと、更に興味深い点は、「現

実は人間の頭の中にだけ存在するものであって、それ以外の所では見つからないのだ」という言葉から考えさせられる「歴史的真相」と、我々が学問及び知識として身に付けている「歴史認識」とのギャップである。主人公のスミスが行っている歴史記録の改竄作業は、恐らくどの時代に置いても時の権力者に都合よく修正され、都合のいい偽物の事実が次の時代に歴史として受け継がれ、曖昧さと提造により事実となってしまうということがあるのではないかということだ。私たちが当たり前に学び、語る歴史や過去の出来事は、本当にあったことなのだろうかという不安が胸を過る。

ただ、こういった闇の部分に執拗に強調して描くことにより、オーウェルは時代に警鐘を鳴らすとともに、人間の弱さ、愚かさ、そして崇高さを敢えて感じさせようとしているのではないかとも思った。

自分が「今」生きているということには確実に何らかの意義があり、存在しているということは親や先祖が事実としてあったということである。置かれた状況や曖昧な過去によつて道を曲げられたりもするが、それでも人間の可能性、潜在的な能力、心の中の最深部に隠されている明確な正義だけは信じるべきだというメッセージが発せられているように私には感じられた。

システムに逆らおうとして、最終的にはシステムに組み入れられてし

まう主人公スミスの姿を悲惨と見るか、正常と感じるかは難しいところであるが、コントロールされずに否定し続けていたものをいつの間にか肯定してしまうという現象はよくあることで、それは宗教や出世欲を持った状況でなくとも起こりうることではないかと思った。

この小説を読み終わって私には、不安、共感、反逆、従順等、様々な感情が沸き起こったが、流行やマニュアルに規定されたシステムに安易に乗って行くのではなく、自分が心の底から望んでいること、本当にやりたいこと、絶対に進みたい道を、十分な時間をかけて考え、それが見つかった時の為に備えて、一日一日、一瞬一瞬を大切に生きていこうという気持ちになった。偶然の出会いであった一冊の本に、これ程まで感情を揺さぶられるとは思っていなかった。これまでの自分を振り返り、これからの自分を考えるいい機会を与えてくれた、著者であるジョージ・オーウェルに感謝の言葉を捧げたい。

読了作品

『一九八四年』

ジョージ・オーウェル



平成二十八年度、第四十八回

市高祭図書館展

平成二十八年度、第四十八回図書館展のテーマは「時事問題」でした。

今年度は図書課担当の教員がいくつかの題材を用意し、各クラスの委員がその題材の中から選択して展覧を作成する。という形をとっていました。

「南海トラフ地震」について、徳島県に描いても大きな被害を受けることが予測されており、自分でできる対策を模索し、備えを促すことが目的とされており、自分でもできる対策を模索し、備えを促すことが目的とされており、自分でもできる対策を模索し、備えを促すことが目的とされています。

「猫ブーム」の発表におおむね共通する点として、ブームだからと安易に飼育し始めることを憂慮する意見が見られました。

その他の発表についても、発見・発明・税収についてそれとなく利用し、発見されること、歴史を語り継ぐことなどの大切さについて考え、意見を述べていました。

タイトルは左の表の通りです。今年も多くの方に来場いただき誠にありがとうございました。

図書館展示

101HR	進まない核軍縮
102HR	猫ブームの始まりと拡大
103HR	猫ブームについて
104HR	消費税は何につかうべきか
105HR	南海トラフ地震について
106HR	新元素ニホニウム発見
107HR	猫ブーム
108HR	猫ブーム
201HR	次の南海トラフについて
202HR	南海トラフ地震について
203HR	消費税は何に使うべきか
204HR	オバマ大統領の広島訪問
205HR	ドローンの問題
206HR	南海トラフについて
207HR	猫ブーム
208HR	オバマ大統領の広島訪問について

図書委員から

〇私は図書委員会になる前からもと本が好きで、中学でも図書委員であったということもあり、高校でも図書委員になりました。この一年間図書委員会の活動を通して本への接し方がわかりました。本を番号順に並べたり整理する仕事をして、今までの図書委員の方や、先生が工夫していたことを知りました。普段出会うことがなかったジャンルや本を知ることができたのがよかったです。皆さんも機会があれば図書室に来てください。

(101HR)

〇図書委員は、市高祭での研究発表があったり、校誌に掲載する原稿を書いたり、思っていたより大変でした。しかし、その分やりがいもあって、良い経験になったと思います。特に研究発表では、テーマを「猫ブーム」にしたこともあって、より楽しかったことを覚えています。しかし、なかなか他の図書委員と意見が合わず、話が進まない時もありました。それでも何とかやってこれて本当に良かったです。

面倒くさいと思うことも多かったですが、本が好きであることや図書委員としてがんばりたいという気持ち

ちで一年を終えることが出来て、本当に良かったです。この気持ちのまゝ、来年も図書委員会の一員として活動をしていきたいと思っています。また、一年生のときから図書委員をしていて、二年生でもなりやすいと思うので、来年は先輩としての気持ちも大切にがんばりたいです。

(102HR)

〇調べものをするときやニュースを見るとき、ほとんどの人がスマートフォンを使っています。確かにスマートフォンは手軽に早く情報を得ることが出来ます。しかし、その情報が必要しも正しいとは限りません。

一方、それが本だった場合、本には誤情報はないし、確実に正しい情報を得られます。スマートフォンで調べるよりも時間がかかるという点はあると思いますが、その分自分が調べようと思っていなかった別の情報も知ることが出来る機会がたくさんあると思います。だから、これからも図書室を積極的に利用していきたいと思っています。

(103HR)

〇私は、本を読むことが大好きです。好きになった理由は、ある一冊の本を読んだのがきっかけです。図書室にはさまざまなジャンルの本がたくさんあります。だから、皆さんがもしも、好きだと思える本にきつ

と出会うでしょう。一冊大事な本に出会うと、本を読むのが楽しくなり好きになると思います。皆さんも図書室を利用し、自分の大事な一冊を見つけてください。

(104HR)

〇図書委員になって本の整理をした時有名なマンガの英語版の本が置いてあるのをみつけました。日本語以外の文字で書かれている本が置いてあったのに驚きました。他にもとても分厚い本が置いてありました。図書委員になって図書室には種類豊富に本が置かれているのがよく分かりました。市校の図書館は優れていると思います。

(105HR)

〇今年一年は新しい経験ばかりでも早く過ぎていきました。色々な心配事や楽しい事も、もう昔の事のように思えます。新しい仲間や新しい環境にも心地良さを感じられるようになりました。今年は挑戦と生成の一年でした。もう終わってしまうと思うと少し悲しいです。

(106HR)

〇私は読書が好きで図書委員会に入りました。図書委員の仕事で本を並べていると、懐かしい本を見つけたら、興味をひくような本に出会ったりしました。読書は様々な知識や考えを学ぶことができます。図書室には、たくさん種類の本があるので、皆さんもお気に入りの一冊が見つ

ると思います。私はこれからたくさんの人に図書室を利用してほしいです。

(107 H R)

○私は本が好きなので図書委員会に入りました。主な仕事が本の整理だった為、この仕事によりどこにどんな本があるかや、本に振り分けられている数字の意味を知ることができ、目的の本を楽に探せるようになりました。また、意外とこの仕事

が楽しく、気が付けばもう仕事の時間が終わっているなんてこともありました。市高の図書館には、専門書から誰でも気軽に読める小説まで幅広くそろっているのが皆さんも是非一度利用してみてもどうでしょうか。きっと気に入った本が見つかるのではないかと思います。

(108 H R)

○二度目の図書委員だったこともあり、スムーズに仕事ができたと思います。本の整理を通して本の分類の法則を覚え、並べていくのが性に合っていて楽しかったです。そして、図書室に行く機会も増えました。初めは仕事をしていただけでしたが、そこで様々な本と出会いました。自分が広がった一年間になりました。

(201 H R)

○私は元々本が好きで、一年生のときからよく図書室へ本を借りに行っていました。今年図書委員になり本の整理や本についているシールの張

り替えをしました。いつもだれかがこういう風に本を図書室をきれいにしてくれているから気持ちよく図書室を利用してできたのだなと思いました。新しい本もたくさん入っているのもっと図書室の利用者が増えればいいなと思います。本を読むことで他人の感性に触れることができるので是非お気に入りの一冊を見つけないでください。

(202 H R)

○この一年間、図書委員での活動を通して、今までよりさらに本を読むことを身近に感じる事ができるようになりました。私が図書委員に入った理由は、中学の時から続けたことと、本を読むことが好きだからです。実際に図書委員になってみると、文化祭でのレポートの作成や棚整理、本棚の制作など楽しいことばかりではなく、何度も何度もレポートの原稿を書き直して先生方に添削してもらったり、原稿を作るためにたくさんさんの資料を調べたりしてとても大変でした。でもその分、今の日本の現状を改めて知ることや、文章の書き方を教えてもらうことができました。図書委員は、大変なことだともやりがいのある委員だとも思います。本を読んで、新たな知識を手に入れることは、これからの生活に役立つと思います。図書室にはいろいろなジャンルの本がたくさんあ

ります。きつとお気に入りの一冊が見つかるはず。是非、図書室を利用してみてください。

(203 H R)

○図書委員の仕事は、大変なことも多いイメージでしたが、実際はとても楽しいことばかりでした。文化祭での展示物の作成によって知らないことが知ることができ、本についてより一層興味が沸きました。学校の図書室には、たくさん本があります。自分の興味のある本を見つけ、図書室をたくさん利用してほしいと思います。

(204 H R)

○私は、今回初めて図書委員になりました。もともと本に興味はなかったのですが、図書室を利用したこともなかったし、図書委員の仕事も全く知りませんでした。でも、昼休みに図書室に行くと、本の整理をしたりするうちに、いつの間にか本に興味を持つていました。図書室で初めて、手にとった本が夏目漱石の本でした。今では、夏目漱石の本が大好きで、自分で買った本のように感じました。全く本に興味はなかった私が本に興味をもつようになったのは、図書委員の仕事があったからだと思います。

(205 H R)

○今回、初めて図書委員をさせてもらいました。少しめんどくさいとは思いますが、思っていました。そんなことありませんでした。本を読んだり、

本でいろいろなことを調べたり、本と接することがこんなにも楽しいんだということに気づかせてもらいました。最近では、ほとんどの人が携帯を持っていて、わからないことがあっても、携帯で調べればすぐに解決することが出来ます。だから、本とは無縁な人もたくさんいると思います。私もそのうちの一人でした。

でも、本で調べるとインターネットには書いていないものもたくさんあることがわかったこともあり、とても良い気分になりました。皆さんも携帯ばかり使わず本を利用してはどうでしょうか。

(206 H R)

○図書委員になって、本を読む楽しさを改めて感じる事ができました。最近はスマートフォンでゲームをしている人が多いけど、もっと本を読む習慣をつけてほしいと思いました。図書室にはいろいろなジャンルの本があるので、積極的に図書室に足を運んで本を読んでほしいです。そこからもっと多くの人が本のすばらしさに気づいてくれるといいなと思います。

(207 H R)

○今年は様々な校外行事に参加したこともあり、図書室の本を読むことを目的とした利用だけではなく、パソコンで調べることが目的とした利用をすることが多かったです。またクイズ研究や課題研究で資料が必要

になり、図書室で資料を探すたびに改めて本の豊富にあることに驚きます。経済学、科学、文学、紀行、新書、古典、郷土史など。調べごとをするには十分に環境が整っていると感じられました。本年も調べごとをする機会が多いので図書室を利用したいです。

(208 H R)

編集後記

現在、ある調査では、一ヶ月に読む本の数は、小学生で一一・四冊、高校生で一・四冊と激減している様です。しかも、高校生の不読者は六割近くを占めているという結果があります。今の高校生は一四〇文字の中で情報を消費しているといわれています。たった一四〇字の中で、どんな創造性や考えるスキルを得ることが出来るでしょうか？創造性を身につけるのにはいろいろな方法があるでしょうが、一番安価で、手取り早く、場所もとらず、準備もいらないのは読書ではないでしょうか？そして経験するたびに新しい方向や方法を指し示してくれるのも読書ではないのでしょうか？皆さん一ヶ月にせめて一冊は上質な本を読みましよう。図書委員のみなさん一年間お世話になりました。

(図書課長)